

## シェリーの位置

菊池 亘

一群のロマン派の詩人たちは、それぞれ、すでに、その位置を確立している、と言ってさしつかえはないようである。シェリーよりは、かなり、あとになって注目されたキーツでも、すでに、その占める位置は、不動に近いものがある。アーノルドがシェリーに加えた有名な批評の言葉は、こんにちでも通用しかなない状態にある。「虚空のなかで、輝かしい翼を、無益にバタバタやっている、美しく徒勞に終わる天使」シェリーの姿は、たしかに、ロマン派の詩人を代表するものであるかもしれない。表面的にロマン派の詩人を示すのには、シェリーのこの姿が、もっとも適當であるかもしれない。したがって、クィラ・クーチ (Arthur Quiller-Couch) の言葉は、このシェリーの姿をよく表現している。「実は、シェリーの人間の魅力が…… (中略) ……彼を、全ロマン派運動に対して、犠牲 (whipping-boy) の位置へと彼を進めてきた。すなわち、自虐的な魂の持ち主である彼は、ルソー以来、すべてのロマン派の作家たちに普通に見られる弱さとして、殊に、その全ロマン派運動に、もっともありがちな唯一の疾患に対する刑罰を、一人でもって、堪えるようにさせられてきたのである。」<sup>(1)</sup>このよ

うに、ルソーに始まるとされる、ヨーロッパのロマン主義の悪い面をことごとく背負わされてしまう結果になってしまったことには、ここで、もう少し苛酷な見方をすれば、シェリー自身に責任がないとは言えないこともないのである。すなわち、彼の作品は、たしかに、リーヴィス (E. R. Leavis) の言葉を借りて言えば、「繰り返しが多く、もやのかかった感じで、通り一遍の同じような自尊心の高さを示し、そして、しばしば、安価な感情をもち、したがって、手取り早く言えば、うんざりする」<sup>(2)</sup>面が、たしかに、あるのである。このように言われてしまえばこれは、全ヨーロッパにおけるロマン主義の弱点を如実に示したことになる。ここに至ればシェリー批評の苛酷は、その極に達したことになる。もういちど言いかえれば、ヨーロッパのロマン主義の弱点を見ようとするならば、シェリーに行くのには如くはないということになるし、ルソーに始まるロマン主義が、シェリーにおいて実を結んだということにもなってくる。こうなってくると、ここから面白い問題が出てくる。というのは、このルソーとシェリーをつなぐ線に注目するならば、シェリーのなかから、ヨーロッパ的な性格の一面が、かなり、はっきり浮かびあがってくるはずである。しかし、今のところ、そのような方向からシェリーを見てゆこうとする研究はないようである。このような研究が少なくとも、今のところ目立ったことになっていないのは、この方向には、何らかの無理があるのであろうか。たしかに、これは今後、もっと深く考えてみて、いいことのように思われる。ところで、もういちど、ここで、

話を前にもどして、その極に達したと考えられる、シェリーへの酷評を取りあげなければならぬ。この酷評に至ったシェリーに対する批評家たちの気分を、そのままに、見すげずに堪えず、出てきたのが、おそらくリード (Herbert Read) の「シェリーの弁護」(The Defence of Shelley) であろう。ところが、この論考は、じつに奇妙な結果に終わってしまったことは周知のことである。これは、不運のシェリーを弁護して、その正しい位置に復位させるのを目ざしていたのであろうが、じつは、リード自身の批評の方法の弁護に終ってしまったのである。これについての、くわしい考察は、ここでは不必要であると思われるので、これ以上、立ち入ることは控えるが、自身の批評方法の裏付けとしてシェリーを利用したのに、とどまったのであるから、この論考は、無視して、さしつかえはないし、また、シェリーの再評価、ないしは、再発見には、なんの寄与もしていない。

今日まで、シェリーの、おのずから発する天才のみが注目されて、その結果である作品が無視され、かつ、シェリーの多くは、後天的に獲得されたものであることも忘れられてしまっている、という事実も、また、新たに思いだす必要がある。この面からシェリーの姿を、とらえようとしたのが、ロジャーズ (Neville Rogers) である。彼は、その著「シェリーの工房」(Shelley at Work: A Critical Inquiry, Oxford, 1960) において、シェリーの実際の詩作の姿を究明しようと企てている。この方向は、たしかに、今日までに見られなかった、そして、

精到なものであると言わなければならぬ。この研究は、今までに見られなかったような、より正確な、シェリーの芸術の特色と、その個々の作品の本質への考察が見られる。この点から言えば、あるいは、ひとつの時期を画するものであるとすら言ってもいいかもしれない。しかし、われわれは、この研究において全く満足するというわけにはいかない。と言うのは、この研究によって、シェリーの正しい位置の方向が示されているわけではないからである。(もちろん、その方向に対する、なんらかの手がかりが、ここから得られないというわけではない。) このように、今のところ、大きくシェリーの位置の再評価というものに対して、その方向転換を示すようなものは見あたらないようである。だいたい、ここで、いま、われわれが期待している再評価というのは、どのようなものであるのか、ということが当面の問題となってくる。そして、この問題の出発点を、どこに求むべきであるかということが、やはり最初に問われるのが順序であろう。この出発点は、やはり、ルソーに始まるロマン主義の、ひとつの系列を代表するものとして、シェリーを考へることである。シェリーの生きた時代は、ここで改めて言うまでもなく、ほぼ、ルソーの生きていた時代に直結している。とすればこの二人のロマン主義者の生きた時代は、近代が、ようやく、良かれ、悪しかれ、成熟してきた時代ということになる。したがって、きわめて平凡なことになってしまうが、この近代という背景を強く意識しながら、シェリーを考へてみることも、少なくとも、正しく彼の位置をとらえることになりそう

である。この面を強く意識しながらシェリーを究明して行った研究は、今のところ、まだないようである。したがって、以下において、折にふれて、私を触発した、いくつかの考察を参考しながらシェリーの近代的な一面を示すと思われるものを断片的ながら、輪郭づけてみたいと思う。ここで、近代的な一面ということと言ったが、より正確にこの面をとらえようとするならば、すでに述べたように、ルソーとの関連において、考察がすすめられなければならないであろうが、今のところ、私には、それを為しうる力はない。バビット (Irving Babbitt) の「ルソーとロマン主義」(Houssea and Romanticism, Houghton Mifflin, 1919) も、もちろん、そのなかに、おいて、ルソーのロマン主義とシェリーとの関連、ないしは、影響について触れているが、バビットの主眼とするところは、ここにあるわけではないので、これが、シェリー再評価に大きく働きかけているとは言えないであろう。したがって、このルソー対シェリーという問題は、いちおう、切り離して、シェリーだけを考察の対象として行くことにする。

ここで、われわれは、もういちど、アーノルドに帰ることから始めなければならない。というのは、その説くところの当否については、すでに、かなり批判が出つくしたといってもいいであろうが、ロマン派の詩人たちを、とにかく、はっきりとした形において、批評の対象にしたのは、なんと言ってもアーノルドの功績であるからである。アーノルドは、バイロンとシェリーについて、つぎのように見ようとする。(アーノルドは、

もちろん気が付いていたであろうことは、間違いないことであるが、以下における、この二人の詩人の類似点のほかに、なお、いくつかの点において、ロマン派の詩人のなかで、これほど似ている詩人はいない。よく習慣的に、シェリーとキーツを並列するが、これほど意味のないことはないし、また、この二人の詩人ほど、ロマン派の詩人のなかで異質的な詩人はいない。バイロンもシェリーも共に貴族の出身であり、その環境にあきたらずして、社会に反逆を試みた。この反抗の精神のなかに、近代的な態度が見られる、というのである。たしかに、この反抗的な態度は、近代精神の主たる要素であるとされる自我の強い意識の発現には、ちがいないであろう。しかしこの線をあまり強く伸ばしてゆくと、そこに、ひとつの危険性を生じかねない。と言うのは、この精神を強く主張しすぎると、これらの詩人のなかに哲学者を求めることになりかねないからである。この面から、シェリーを見てゆくことは、いちおう興味のあることにはちがいないけれども、詩人の姿と、そして、その作品に、かなりの歪みを加えることになることは承知しておかなければならない。ゲーテの言うように、詩人は哲学を持たなければならぬが、哲学はかくさなければならぬからである。したがって、読む側のほうも詩人を哲学者にしてしまっただけとはいけないのである。このことについて、リーヴィスが、ウェレク (René Wellek) の、シェリーに対して哲学を求めようとする態度を、きびしく警戒しているのは、まさに、当然と言わなければならない。(5) そして、また、なによりもまず、シェリー

の作品においてわれわれが感じ取らなければならぬものは、「調和のない理性の二つの極端、すなわち、虚空のなかにおける組織と、意味のない、書類の連続に対する、まさに解毒剤とも言うべき、ひじょうに論理的な狂気」<sup>(6)</sup>、シェリー自身の言葉をもってすれば「調和のとれた狂気」<sup>(7)</sup>でなければならぬ。このように、シェリーの近代精神を強調するあまり、彼を詩人の座から引きづりおろすような愚はさげなければならぬ。むしろ、いま見たように、近代精神の根底をなす理性にすら不信の態度を示し、シェリー独自の立場なり見方なりを持していた事実こそ真に近代的なことではなからうか。

いま、ここで、近代的な態度ということについて、たんなる、環境への反抗というよりも、むしろ、シェリー自身が、いかにも詩人らしい、感性的な立場に立っていたことのほうが、近代的ではなかったらうか、ということ述べたが、さらにシェリー(と同じくバイロンも、そうであるが)には、この独自の近代的な態度を貫く、もうひとつの独特なものがある。それは、ビュリタンの要素である。この要素がシェリーにおいて求めてやまない、奇妙な熱意<sup>(8)</sup>となって現われてくる。(バイロンの場合は、自虐的な、一種の罪の意識に悩む、暗うつな精神となり、それがそのまま、作品に反映してくる。)このように、きわめて、大ざっぱに見ただけでも、シェリーの近代的態度というものは、彼独自の、詩人的な、すなわち、感性的なものであり、さらに、その心情の底流にビュリタンのなるもの

が流れているといったように、きわめて複雑なものであることに気が付く。したがって、ただ、たんに環境に反抗するというような、きわめて表面的な事実だけでは、彼の場合、その近代性を説明する手段とはならないのである。この反抗というものが、時と場合によると、まったく個人のわがままと結び付く、おそらく近代性とは無縁の行動にもなりうるのである。したがって、シェリーが、無神論を説くパンフレットをオックスフォード大学に在学中、これを配布したという有名な事実も、あまり重点を置いて考えるわけにはいかないのではなからうか。少なくとも、ここに重点を置いて無神論者シェリーを引き出すよりも、むしろ、すでに述べたように、彼の心情の底流として流れていたビュリタンの要素の解明に向うことのほうが大事である。この要素が、シェリーの芸術に対する完全慾だけでなく、作品そのものに、どのように働きかけているか、また、どのように作品のなかに生きているか、ということのほうが、より重要であらう。

つぎに考えてみなければならぬことは、他のロマン派の詩人との共通問題である、十八世紀との関連である。ロマン派の詩人が、ことごとく、十八世紀の伝統を見事に受けついだということは、すでに、改めて言うまでもないであらう。ちょうど、この現象は、ルネッサンスという、ひとつの大きなヨーロッパの動きが、中世紀における矛盾を解決しながら、見事に、大きな花を咲かせたことに、よく似ている。シェリーの場合、十八世紀は、彼に対してどのような意味を持つか。この問題につい

ては、ふたたび、リーヴィスの意見を参考にしながら見てゆくことにする。<sup>(9)</sup>他のロマン派の詩人が、そうであるように、シェリーもまた、十八世紀の詩風に反撥したと一般的に考えられている。たしかに、彼は、疑うべからざる一個の天才であり、この反撥の代表者と見なされている。彼の使用する言葉は、じつに、十八世紀風の、「述べる」(stating)のものは、はるかに離れているように思われたかもしれないし、また、彼の詩のなかには、言いかえのきく内容を見出すことは困難なのである。ここまででは、たしかに、シェリーの姿は反十八世紀的である。しかし、詩人シェリーは、「野望のむなしさ」(*The Vanity of Human Wishes*)を書いた詩人としてのジョンソン(Samuel Johnson)のアンチテーゼと言うわけにはいかない。その意味は、シェリーはジョンソンと同じく、言葉をドラマティックに用いているという点において、共通するからである。もし、この二人の詩人の言葉の使いかたが、ドラマティックでないところがあるとするならば、その程度は、まさしく同じであると言わなければならない。シェリーの感情の扱いかたは「陳述」(statement)ではないかもしれないが、しかし、それは「陳述」とはあまり違ふところのない「告げる」(telling)ことになっている。ただ、ジョンソンと異なるところは、彼が、知的な、そして、道徳的な目的をもって出発するときに、シェリーは、感情的な目的をもってする。(そして、これは、感情の効果をひびくそぐことになる。)さらに、彼は、その目的を「陳述」と言っても差し支えない、はっきりしたやりかたで、追求し

てゆく……、というのが、リーヴィスの意見である。だいたい、このように、シェリーの作品のなかには、「野望のむなしさ」に見られるような、十八世紀において、利用された古典的な(および、普通に考えられるように、シェリーに見られるとされている叙情とは対蹠的な)要素が感じ取られるというのである。こうなってくると、やはり、この点においては、バイロンとかなり近いものを持っていると言わなければならない。ここで、また、シェリーの近代的性格の一面が、かなり浮きでくるように思われる。もちろん、これだけでもって、シェリーにおける十八世紀的なもの、あるいは、シェリー対十八世紀というような問題が、大きく片付くとは考えられないが、このように、かなり、はっきりとシェリーと十八世紀という問題の、ひとつの方向を示してくれたのは、リーヴィスの卓見と言うべきである。このように、いままで見てきた近代的性格というものを、もっと具体的に、作品のなかに求めようとすると、どのようなことになるのであろうか。

たとえば、「詩劇」(A Lyrical Drama)と称する「ヘラス」(Hellas)のなかに盛られた思想を求めようとすると、これはミルトンの「失樂園」の一節に、<sup>(10)</sup>かかわってくる。リチャーズ (T. A. Richards) は指摘する。

—black it (=the other Shape) stood as Night,  
Pierce as ten Furies, terrible as Hell,  
And snook a dreadful dart: what seemed his head

The likeness of a kingly crown had on.

—Paradise Lost, II. 670—3.

—Peter Bell the Third, III. 1.

——他の形は夜の如く黒く、  
十人の復讐の女神の如くはげしく、地獄の如く立って  
いた、

そして恐ろしい投げ槍をふるい、その頭とおぼしきもの  
は、王冠のごときものをつけていた。

いま、ここに、くわしく検討する暇はないが、おそらく、こ  
に現わされたものは人間の不可避の運命を象徴するのであ  
う。おそらく、もっとも深く近代とかかわりをもつミルトン  
の、ここに現わされた一端の思想と共通するものを持つとす  
れば、やはり、これもシェリーの位置をとらえる点から言つても、  
さらに、掘りなげてみる必要があるような気がする。  
さらに例を他の作品に、もとめれば、もっと、はっきりとシ  
ェリーの近代性を示すものとして、つぎのごとき一節が指摘さ  
れてくる。

Hell is a city much like London——

A populous and a smoky city;

There are all sorts of people undone,

And there is little or no fun done;

Small justice shown, and still less pity.

地獄とは、ロンドンそっくりな都会だ——  
人が多くて、煙りたい都会。  
有象無象がすっかりやられ、  
おもしろ、おかしくもない。

正義などめったになく、憐れみは、さらさない。

これは、誇張して言えばボードレルにすら通じかねないもの  
がある。このような、都会に対する見かたは、他のロマン派、  
ことにワーズワス、コールリッジ、キーツなどには見られない  
感覚と言わなければならぬ。あるいは、バイロンにすら見ら  
れないものであるかもしれない。この一節などは、まったく現  
代的とすら言ってもよさそうである。さらに、これは、T・  
S・エリオットのですらあると言つてもいいかもしれない。す  
でに、ここには「荒地」が横たわっている。

もちろん、これだけで、シェリーの作品がとらえられたと言  
うわけにはいかないが(たとえば、前に引用したリーヴィス  
のシェリーの欠点に関する見解の是正なども大いに必要であ  
る)、彼の持つ近代性が、少なくとも、かんたんに解決のつく  
ようなものではなく、意外に現代にすら強くつながるものを持  
つてゐる、きわめて微妙で、かつ、複雑なものであるというこ  
とに、われわれは、もういちど気が付く必要があるようである。

(一) Arthur Quiller-Couch: *Studies in Literature*, Sec-

- ond Series (Cambridge, 1923), p. 81.
- (2) F. R. Leavis: *The Common Pursuit* (Chatto and Windus, 1958), p. 221.
- (3) Herbert Read: *The True Voice of Feeling* (Faber and Faber, 1954) 正統學。
- (4) Cf. Raymond Tschumi: *A Philosophy of Literature* (Linden Press, 1961), pp. 106-7.
- (5) Cf. F. R. Leavis: *op. cit.*, p. 220.
- (6)(7) Raymond Tschumi: *op. cit.*, p. 175.
- (8) Roger Sharrock: *John Bunyan* (Hutchinson's Univ. Lib., 1954), p. 14.
- (9) Cf. F. R. Leavis: *op. cit.*, p. 111.
- (10) I. A. Richards: *Principles of Literary Criticism* (Kegan Paul, Fourth ed. (1930)), p. 217.  
(一橋大学助教授)